

大学院教育支援機構（DoGS）海外渡航助成金 報告書

Outcome report

計画名 Plan	高大接続における学生の移行に関する比較検討
氏名 Name	田中孝平
研究科・専攻・学年 Graduate school/Division/Year level	教育学研究科・教育学環専攻・博士後期課程 3年
渡航国 Country	ドイツ, ベルギー, オランダ, イギリス
渡航日程 Travel schedule	2023年 8月 11日 ~ 2023年 8月 27日

- ページ数に制限はありません。No limits on the number of pages
- 写真や図なども組み込んでいただいて結構です。You can include pictures or illustrations.
- 各項目について具体的に記述してください。Please fill in each item specifically.
- 日本語または英語で記載ください。Please use Japanese or English.

渡航計画の概要 Outline of the travel plan

本研究の目的は、日本の高校と大学の接続（以下、高大接続）における学生の移行の多様性をヨーロッパ諸国における移行実態と比較検討することによって、高大接続における移行概念を再構成するための手がかりを得ることにある。

日本の高校と大学の接続（以下、高大接続）に関する政策や実践を概観すれば、高校と大学の間にあるギャップ（学問的・社会的困難や不安）をいかにして埋め、学生の「円滑な移行」を支援するののかという点が強調されていることがわかる。一方、英国を中心とした欧州圏では、高大間のギャップがもたらす困難や不安を学生自身で乗り越えることで得られる成長をふまえた「生成 (becoming)」という概念が提唱されてきている。私は、これまでこのような対立構造を分析枠組みとして、日本人学生が経験した大学への移行実態を質的に分析してきた。

そこで、今回、「生成」概念が提唱された英国において開催されるヨーロッパ教育学会にて、日本の学生が経験した移行の多様性を発表するとともに、ヨーロッパ諸国における学生の移行実態や高大接続・移行研究の到達点と課題を学ぶことで、高大接続・移行研究を国際的視点からさらに発展させたいと考えた。そのために、以下に挙げる2種類の現地での研究を実施した。

(1) ヨーロッパの研究者（ベルギー、オランダなど）の高等教育研究者らとのディスカッション

まず、2023年8月17日に、ルーヴェン・カトリック大学にて、Lien Demulder氏、Jordi Heeren氏、Sofie Van Cauwenberghe氏（ルーヴェンカトリック大学）と、ベルギー・フランダース地方における高等教育に関する研究討議を実施した。とりわけ、彼らが研究を推進している「コロンバス・プロジェクト (Columbus Project)」に関する研究概要について説明を受けた後、同プロジェクトに関してディスカッションを行った。その後、事前に用意した移行研究に関わる論点に関して議論を深めた。

次に、2023年8月18日、ユトレヒト市内にて、Annabelle Christiaens氏と、Gingyun Wang氏（ユトレヒト大学）とオランダと日本における高等教育及び大学入学者選抜の実態に関して意見交換を行った。特に、彼らが所属して研究を推進してきた「In transition」チームの成果について聞いた後、私が事前に用意した移行研究に関わる論点に関して議論を行った。

さらに、2023年8月21日、グラスゴー市内にて学会参加者有志によって、ECER 2023の開催日前日に

行われたイベントに参加して各国の若手研究者と研究に関して意見交換を行った。このイベントには、さまざまな分野の研究者が参加していたが、各国の高等教育の実状について意見交換を行うことができた。

なお、ドイツには当初の計画通り訪問したが、ドイツの研究者との間ではアポが取れなかったため、ドイツ滞在期間中の予定を変更し、ルートヴィヒ・マクシミリアン大学ミュンヘン（ミュンヘン大学）の図書館を訪れるなどして、資料準備や整理のための時間に充当することにした。

② ヨーロッパ教育学会（ECER 2023）での口頭発表（Paper）及び関連発表への参加

2023年8月22日から8月25日に開催されるヨーロッパ教育学会（ECER 2023）に参加した。特に、私は、「22. Research in Higher Education」の部会にて8月24日の09:00-10:30に、口頭発表（Paper）を行った。また、発表日以外は、自身の研究テーマに関連する発表に参加し、各国の高大接続・移行研究の到達点と課題についても認識を深め、高等教育研究の最新動向について学ぶことを目指した。

成果 Outcome

今回の海外渡航を通じて得られた成果は、次の3点にまとめることができる。

① 移行研究に対するバリエーションへの理解

各国の研究者とのディスカッションを通して、「高大接続」や「高等教育への移行」研究のバリエーションについての仮説をもつことができた。まず、大きな分類として、学校教育システム体系を意識した研究と、あまり意識しない研究に大別されることがわかった。前者の研究では、各国の教育システムの特殊性について説明した上で実証的に研究を進めるのに対して、後者の研究では、各国の教育システムの特異性については関心を示さず、哲学的・思弁的な議論が目の前の学生の移行実態とどのように重なり合うのかを議論の対象とする点に違いが見出される。このように、前者は中等教育と高等教育間の制度面における接続関係に焦点をあわせるのに対して、後者は両者の制度面での接続関係にはほとんど関心を注がない。

また、前者の研究にもいくつかのバリエーションがみられることがわかった。複線型の教育体系をとり、早期からトラックが規定される教育システムをとる国において、進路選択のミスマッチが深刻化している国では、進路選択の意思決定プロセスを明らかにする研究が多くみられる。これらの研究は、student choice といった研究の潮流を形成していることがわかる。一方、退学率の高さと4年学位取得達成率の低さを問題意識とした進める研究の場合は、退学防止研究の潮流を形成しているように思われる。この研究では、移行元が中等教育以外に、家庭や仕事・社会からの学生の移行を対象とした研究も包括されている。さらに、マイノリティの移行など、「誰が移行するのか」という点も議論にあがることが多く、初年次教育研究との親和性を持ちやすいことも明らかになった。

以上のように、「高大接続」や「高等教育への移行」に関して、何を問題とするかによって、複数の研究のバリエーションが描かれる可能性が示唆された。より具体的に言えば、(1) 学生の移行を見るために正しいレンズをつけられていないことを問題意識とした研究、(2) 各国の教育システムを前提としたトラックの固定化に伴う進路選択のミスマッチを問題意識とした研究、(3) 学生の早期での中退を問題意識とした研究に大別することができるのはでないかといった仮説が得られた。

② 自身の研究に対するフィードバック

私の学会発表後の質疑応答では、まず、日本における中退率はどのくらいなのか、インタビューの中で中退について語った学生はいるのか、といった中退に関わる質問や、日本の大学入学者選抜の仕組みや4年学位取得率に対する見方など、日本の大学教育に関する基本的な論点が提示された。

さらに、「研究 (research)」に関わるコンピテンシーという視点から移行に迫るだけではなく、異なる視点から移行実態に迫っていくことも必要ではないかという指摘を受けた。さらに、学生の語りが **positive** なのか **negative** なのかを検討する際に、「センチメント分析 (Sentiment Analysis)」を使用するのはどうかという異なる分析枠組みに関しても紹介を受けた。いずれの指摘についても、自身の研究を多面的に解釈し、さらに発展させる上では有効な手立てであると考えており、今後の研究に向けて重要な示唆をいただいた。

このような参加者との議論を通じて、とりわけ、日本の「高大接続」や「高等教育への移行」に関して、構造的にどのような問題があるのか、その問題の所在をより鮮明に描く必要性を実感した。このような参加者との質疑応答を通じて、日本における高等教育への移行の固有性を再構成するとともに、新たな視角から研究を発展させる可能性を検討する機会を得ることができた点が大きな収穫であった。

(3) 他分野に属する研究者ネットワークの形成

さらに、若手研究者を中心として研究者のネットワークを拡張することができたのは大変大きな収穫となった。特に、ベルギー、オランダにて個別のディスカッションを行った研究者に加え、ECER2023では、高等教育研究者以外にもさまざまな分野の研究者と知り合うことができた。今後、研究者としてのキャリアを歩んでいく上で相互に研究を高めていくことができる研究者ネットワークを構築し、そのネットワークに参画できたことは、教育学研究者としてキャリアを進める上で大きな収穫となった。



図1 ルーヴェン・カトリック大学での議論後

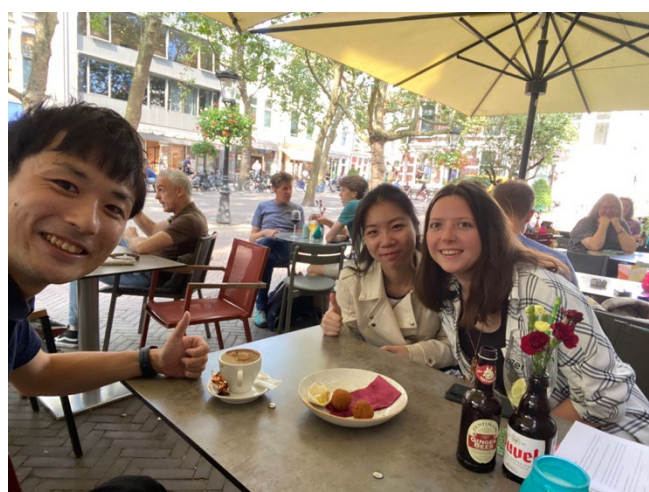


図2 ユトレヒト市内のカフェでの議論の様子



図3 グラスゴー大学での発表の様子



図4 学会参加者との交流の様子

今後の展望 Prospects for the future

今後の研究の展望は以下の通りである。

(1) 移行研究のバリエーションをふまえた自身の研究の再定位

今回の海外渡航を通じて、「高大接続」「高等教育への移行」研究に関して、さまざまなバリエーションがみられることがわかった。もともと、このバリエーションは、一対一対応で位置づくものではなく、グラデーションの中に存在していると考えられる。自分の研究がグラデーションの中のどこに位置づくのかを再定位することによって、自分の研究の国際的な位置づけが相対化されることになる。今回のディスカッションを踏まえて、自分の研究の位置づけを再度捉え直した上で、博士論文の執筆を進めていくことにしたい。

(2) 「高等教育への移行」に関わる国際的な比較研究の遂行

また、今回、構築することができた研究者コミュニティを今回限りの「一過性」のものとしないうちに、引き続きコンタクトを取り続け、国際的な比較研究に着手していきたいと考えている。そのためにも、並行して教育学における国際的な比較研究についての基礎的な手法についても学びを深めていくことを目指す。



図5 ミュンヘン大学の正門前



図6 ルーヴェン・カトリック大学の図書館